



校長室だより

令和8年度

5月8日

NO. 5

先は見えないけれど、自分の手でつかもう、感じよう！自分の輝き

「十のうち一できていないことがあって、いきなりその一を指摘される。(中略)すると、言われた人は、九の正しいことの評価を受けていないことになる。脳は正しく動いていることを認識できないで混乱する。」

『対話のトリセツ』(講談社10の新書) 黒川伊保子著



自分の手で稚鮎を放流しました。また戻ってくるといいですね。全校での運動会練習も始まりました。

放流された若鮎が、今年も乙川を遡っていきました。年魚と呼ばれ一年で一生を終える鮎たちの、新たな旅の始まりです。昨今、昔と比べ鮎の獲れる量が減ったり、川の水量や環境の変化があったりする中で、元気に生き抜いてほしいと願うのは、子供への願いと同じだと感じます。

爽やかな春空の下、連休の合間、全校での運動会の練習が始まりました。ラジオ体操や行進は、一年生にとって初めての体験になります。けれど一生懸命、腕を伸ばし、上げて下げてそして振って、また足を振り上げ踏み出し、精一杯、体を動かします。昔と比べ熱中症の心配もあり、目指す姿やその内容は変われども、体を一生懸命動かす点においては、いつの時代も変わりません。

身体を動かす体育は、頭で分かっていたらできたりするものではなく、まさに「体験」といえます。一つの技ができるようになるために、実際に体を動かして、失敗してまた考えて動いて、そして体で「できた」を実感することになります。失敗体験があるからこそ、できた時の成功体験は大きく感じられます。この成功体験が大事で、それにより自己肯定感も高まります。

さらにそれには周りの力も必要となります。できたのかできなかったのか、その認識がなければ、子供は自信のないままです。「わかる・できる・楽しい・輝く」を味わうことができるように、周りが正しく評価し、子供の体の動きや認識に寄り添い、そして子供自身が「できた」と実感できることが大事だと言えます。

日本での自己肯定感は、各国の中でも低いと言われます。秦梨つ子も様々な体験を通して、「わかった、できた、楽しい、輝けた」と自信をもてるようになってほしいと願います。

- ・GWの長い休み中のご支援、ありがとうございました。休み明け、欠席もなく全員登校できました。
- ・今年も、7日の木曜日に3、4年生による鮎の放流が行われました。鮎も元気に泳いでいきました。
- ・2日には河合 2050 フェスティバルが生平小で行われ、多くの方が参加されました。